D-2
“自分”の指示決定における「視点」の役割とその統語的分析

伊藤健太郎

キーワード: 日本語、統語論、束縛、“自分”、極小主義

要旨

最小の統率範疇で束縛されることから、“自分”という語の振る舞いは束縛理論Aに基づいて分析されることが多い。しかし、これまでの研究では統一的な分析が得られていない。(Pollard and Sag, 1992; Reinhart and Reuland, 1993; Cole and Li-May, 1994)

A. 自分$_i$がやりますよ。 発話者$_i$
B. ジョン$_j$がメアリー$_k$に自分$_{i/j/*k}$の本を渡した。発話者$_i$
C. ジョン$_j$はメアリー$_k$が自分$_{i/j/k}$を嫌っていると思った。発話者$_i$
D. 自分$_{i/j}$の本がジョン$_j$の評判を下げた。 発話者$_i$

まず全ての例において、“自分”は発話者として解釈されうる。次にBは“ジョン”と“メアリー”が共に“自分”をc統御するが、“メアリー”は指示対象として許容されない。またCでは、最小の統率範疇に含まれるのは“メアリー”のみであるが、“ジョン”もまた“自分”の指示対象になりうる。最後にDは、“ジョン”が“自分”をc統御する位置に無いにも関わらず、“自分”は“ジョン”として解釈される。本発表では、A-Dに対して、機能範疇Center of Viewを仮定することによって統一的な分析を可能にする。

1. 背景

束縛理論は日本語において(1a, b)の代名詞と照応形の違いを捉えている。

(1) a. ジョン$_i$は彼$_i$を嫌っている。
b. ジョン$_i$は彼自身$_i$を嫌っている。
c. ジョン$_i$は自分$_i$を嫌っている。

束縛理論Bによって“彼”がジョン”と同一指示にならないこと、束縛理論Aによって“彼自身”が“ジョン”と同一指示になることが正しく分析される。そして、(1c)の“自分”もまた“ジョン”と同一指示になることから、“自分”もまた照応形であると分析されることが多い。

しかし、(2a-d)のような例は束縛理論Aによって分析することが難しい。

(2) a. 自分$_i$がやりますよ。 発話者$_i$
b. ジョン$_j$がメアリー$_k$に自分$_{i/j/*k}$の本を渡した。発話者$_i$
c. ジョン$_j$はメアリー$_k$が自分$_{i/j/k}$を嫌っていると思った。発話者$_i$
d. 自分$_{i/j}$の本がジョン$_j$の評判を下げた。 発話者$_i$

まず(2a-d)の全ての例において“自分”は発話者として解釈されうるが、束縛理論Aでは、基本的に同一文中に存在しない先行詞は考慮されない。次に(2b)は“ジョン”と“メアリー”が共に“自分”をc統御することから、束縛理論Aでは“自分”が“ジョン”と“メアリー”の解釈を持ちうることが予測される。しかし実際には、“自分”が“メアリー”と同一指示になることはない。これは「“自分”の先行詞は主語でなくてはならない」という主語条件として一般的に知られている。また(2c)では、束縛理論Aによれば、最小の統率範疇に含まれるのは“メアリー”であることから、“自分”が“ジョン”と同一指示にならないことを予測するが、実際は“自分”は“メア

リー”だけでなく“ジョン”とも同一指示になる。“ジョン”が“自分”を束縛する場合、最小の統率範疇を超えて束縛が起こっていることから、これは長距離束縛と呼ばれる。最後に(2d)は、“自分”は“ジョン”として解釈されうる。しかし、束縛理論Aでは、“ジョンの評判”というDPに含まれる“ジョン”が“自分”を束縛しないため、“自分”が“ジョン”と同一指示にならないことが誤って予測されてしまう。このように、束縛理論Aは(1)のような代名詞と照応形の違いを捉える点で“自分”の振る舞いを正しく分析する一方で、(2a-d)の文の解釈を分析することができない。

また、照応形を使用した文において、(3)のように有生性(Animacy)の有無が文法性判断に影響を与えていることが知られている。(3b), (3c)において照応形である**son propre(its own)** と **sa propre(his own)** の使用されている統語的環境は同じであるにも関わらず文法性に差が出ている。(3b)では有生性を持たない**son propre(its own)**は文法性が低いのに対し、(3b)では有生性を持つ**sa propre(his own)**が文法的である。

(3) a. [Ce pont]$_i$ dispose de **son$_i$ (propre)** architecte.
'[This bridge]$_i$ has **its$_i$ (own)** architect.'
b. [Ce pont]$_i$ a l'air très fragile. **Son$_i$ (*propre)** architecte a reçu moins de moyens que les autres architectes de la région.
'[This bridge]$_i$ looks very fragile. **Its$_i$ (*own)** architect got less means than the other architects of the area.'
c. [Cet enfant]$_i$ a l'air très perturbé. **Sa$_i$ (propre)** mère passe moins de temps à la maison que les autres mères de la classe.
'[This child]$_i$ looks very disturbed. **His$_i$ (own)** mother spends less time at home than the other mothers of the children in the class.'

(Charnavel and Sportiche. 2016, 43, 太字は筆者による)

このように照応形とされる語では、 ①DP間での束縛によって分析できない例がある ②有生性が関わっている、という2つの特徴が観察される。ゆえに本研究では、「視点」が機能範疇として統語的な実態を持ち、そのφ素性と同一のφ素性を“自分”が持つことによって、“自分”の指示決定がなされていると主張する。

2. 分析

まず、極小主義の枠組みとしては基本的にChomsky(1998)に従い、Agreeによってgoalの解釈可能なφ素性をprobeにコピーして、そのprobeの解釈不可能なφ素性を削除するものとする。

(4) a. [$_{TP}$ [$_{T0}$ [$_{T0}$ ~~φ(T^0)~~]+ φ(Subj)][$_{VP}$ Subj . . .]]
b. [$_{TP}$ Subj [$_{T0}$ [$_{T0}$ ~~φ(T^0)~~]+ φ(Subj)][$_{VP}$ t$_{subj}$ . . .]]

(4a)が示しているのは、Agreeによって、主語の解釈可能なφ素性がT°にコピーされ、T°が持つ解釈不可能なφ素性が削除される様子である。(4b)は、Agreeに続いて、EPP素性により主語がTP指定部に移動した様子を示している。

本研究では、「視点」が機能範疇 Center of View (以下CV)として(5-10)のような統語的な実在を持つことを提案する。なお[__]は解釈可能な素性を示し、[u__]は解釈不可能な素性を示す。

(5) CVは[+animate]を持たなければならない。

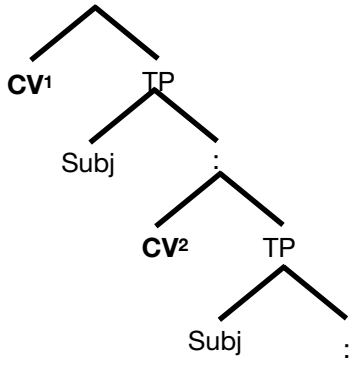
(6) CVは以下のいずれかの形で素性を持つ。
a. [+1st, +singular]を持つ。 b. 上位節のCVと同一の[φ]を持つ。c. [uφ] を持つ。

(7) (6c)の場合、Agreeによって、(8)を満たし[+animate]を持つDP$_1$と、同一の[φ]を持つ。

(8) a. DP$_n$は[+animate]を持つ。 b. CVがDP$_n$とDP$_1$をc統御する。 c. DP$_n$がDP$_1$をc統御する。

(9) 左周縁部に機能範疇 Center of View(以下、CV)が存在すると仮定する。

(10) 本研究で想定される構造



なお、CVと左周縁部のCV以外の機能範疇の関わりについては本研究の範囲を超えるため、(10)ではCVのみを左周縁部に記している。

また、“自分”については以下のように仮定する。

(11) “自分”は[+animate]、[uφ]を持つ。

(12) “自分”は同一節内のCVと同一の[φ]を持ち、その指示対象が決定される。

2-1. CV=[+1st, +singular]の場合

CVは[+1st, +singular]を持ちうる。(2)((13)のように分析される)の全ての例で、“自分”は同一節内のCVと同一の[φ]を持つため、“自分”は発話者としての解釈を持ちうる、と分析される。

(13) **CV¹**(cの場合のみ**CV²**)=[+1st, +singular], [+animate]

a. [**CV¹**$_{i\ TP}$[自分$_i$がやりますよ]]

b. [**CV¹**$_{i\ TP}$[ジョンがメアリーに自分$_i$ の本を渡した]]

c. [**CV¹** $_{TP}$[ジョンは **CV²**$_{i\ TP}$[メアリーが自分$_i$を嫌っている]と思った]]

d. [**CV¹**$_{i\ TP}$[自分$_i$の本がジョンの評判を下げた]]

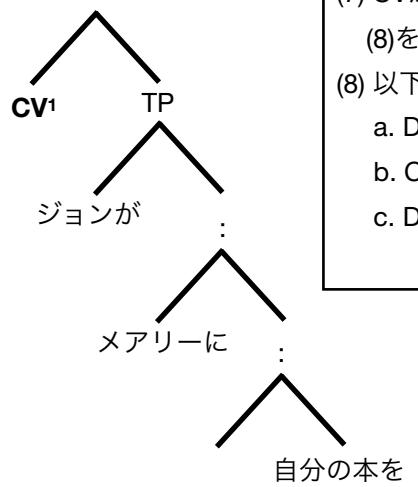
2-2. CV=[uφ]の場合

CVが[uφ]を持つ場合、(2b)((14)として再掲)の場合、(8)よりCV¹と“ジョン”の間にDPが存在しないため、(7)よりAgreeによって、“ジョン”が持つ[+3rd, +singular]がコピーされ、CV¹が持っていた[uφ]は削除される。そして、“自分”は同一節内のCVと同一の[φ]を持つので、“自分”は“ジョン”の解釈を持つ。

一方で“メアリー”とCV¹について考えてみると、(8)に違反するDP、すなわち、[+animate]でありCV¹によってc統御され“メアリー”をc統御するDP、“ジョン”が存在している。そして、“自分”の指示決定は同一節内のCVによってなされることから、“自分”が“メアリー”と同一指示になることはない。これによって、主語条件で記述されていた条件を分析の範囲に収めることができる。

(14)　[**CV**$^{1}_{j}$ $_{TP}$[ジョンがメアリーに自分$_{j}$の本を渡した]]　**CV**^{1}=[+3rd, +singular](“ジョン”)

(15)



(7) CVが[uφ]を持つ場合、Agreeによって、
(8)を満たし[+animate]を持つDP_1と、同一の[φ]を持つ。
(8) 以下を満たすDP_nが存在しない場合である:
a. DP_nは[+animate]を持つ。
b. CVがDP_nとDP_1をc統御する。
c. DP_nがDP_1をc統御する。

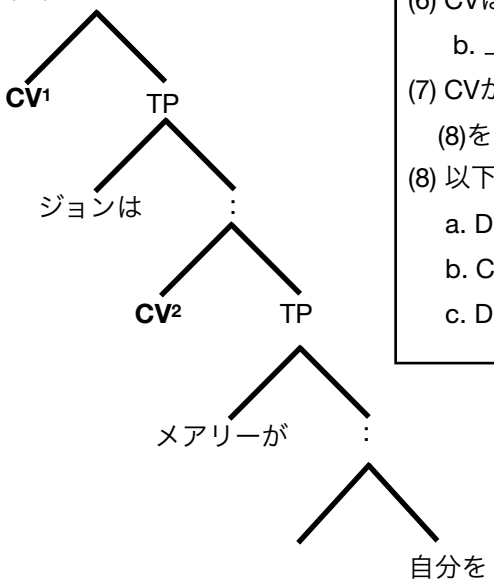
(2c)((17)として再掲)の場合、[uφ]を持つCV^1は、先に示した(14)のCV^1と同様に、“ジョン”と同じ[φ]、[+3rd, +singular]を持つ。ただし“自分”は同一節内のCV^2と同じ[φ]を持ち、その指示対象が決定される。

[uφ]を持つCV^2は、次のいずれかの方法で[uφ]を削除することになる。1つの方法は、このCV^2が(7)によって“メアリー”と同一の[φ]を持つことである。“自分”がこのCV^2と同一の[φ]を持つことによって、“自分”は“メアリー”の解釈を持つことになる。

もう1つの方法は、(6b)によってCV^2が上位節のCV^1と同じ[φ]を持つことである。(16)にあるように上位節のCV^1は“ジョン”と同一の[φ]として[+3rd, +singular]を持つ。このCV^1と同じ素性をCV^2が持ち、CV^2と同じ[φ]を“自分”が持つことによって、“自分”は“ジョン”の解釈を持つことになる。

(16) [**CV**^{1} $_{TP}$[ジョンは **CV**^{2} $_{TP}$[メアリー が自分 を嫌っている]と思った]]
CV^{1} =[+3rd, +singular](“ジョン”)　**CV**^{2} =[?]

(17)



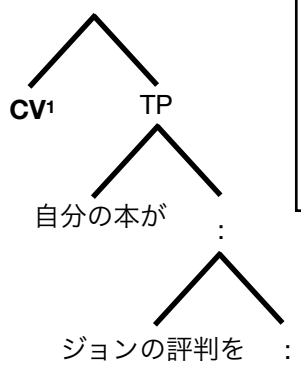
(6) CVは以下のいずれかの形で素性を持つ。
b. 上位節のCVと同一の[φ]を持つ。c. [uφ] を持つ。
(7) CVが[uφ]を持つ場合、Agreeによって、
(8)を満たし[+animate]を持つDP_1と、同一の[φ]を持つ。
(8) 以下を満たすDP_nが存在しない場合である:
a. DP_nは[+animate]を持つ。
b. CVがDP_nとDP_1をc統御する。
c. DP_nがDP_1をc統御する。

(2d)((18)として再掲)の場合、(8)を満たしAgreeによってCV^1がそれと同一の[φ]を持つようなDPは2つ存在するように思われる。1つは“ジョン”である。“自分”は[+animate]を持ちCV^1は“自分”と“ジョン”をc統御するが、“自分”は“ジョン”をc統御しない。ゆえに(8)を満たすDPの1つは“ジョン”である。もう１つのDPは“自分”である。“自分”は[+animate]を持ちCV^1は“自分”と“ジョン”をc統御するが、“ジョン”は“自分”をc統御しない。ゆえに(8)を満たすもう1つのDPは“自分”である。

CV^1が[+3rd, +singular](“ジョン”) を持つ場合、CV^1と同じ[φ]を“自分”が持つことによって、“自分”は“ジョン”の解釈を持つことになる。一方 CV^1が[uφ] (“自分”) とAgreeしようとしても、CV^1が持つ[uφ]は削除されないため、解釈不可能な文になってしまう。

(18) [**CV^1**$_{i\ TP}$[自分$_i$ の本がジョンの評判を下げた]] **CV^1**=[+3rd, +singular](“ジョン”)

(19)



(7) CVが[uφ]を持つ場合、Agreeによって、
(8)を満たし[+animate]を持つDP_1と、同一の[φ]を持つ。
(8) 以下を満たすDP_nが存在しない場合である:
a. DP_nは[+animate]を持つ。
b. CVがDP_nとDP_1をc統御する。

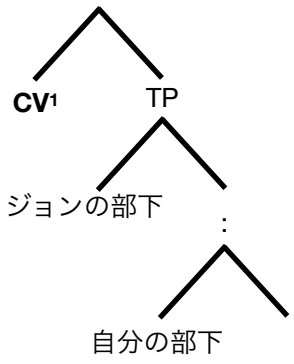
3. その他の例に対する分析

本研究のCVに関する仮定は、以下で示す例についても正しい分析をする。

(20) ジョン$_k$ の部下$_j$ が自分$_{i\ /\ j/\ *k}$の部下を殺した。 発話者$_i$
(21) 自分$_{i\ /\ *j/\ *k}$ の部下$_j$ がジョン$_k$の部下を殺した。 発話者$_i$

(20)の場合、以下のような統語構造を持つ。

(22)



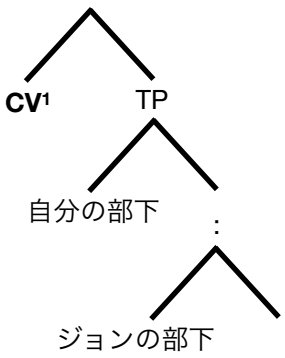
(7) CVが[uφ]を持つ場合、Agreeによって、
(8)を満たし[+animate]を持つDP_1と、同一の[φ]を持つ。
(8) 以下を満たすDP_nが存在しない場合である:
a. DP_nは[+animate]を持つ。
b. CVがDP_nとDP_1をc統御する。
c. DP_nがDP_1をc統御する。

:

まず、本研究では、“自分”が常に発話者の解釈を持つことが予測される。次にCV^1が[uφ]を持つ場合、Agreeが行われるのは、“ジョン”ではなく“ジョンの部下”が持つ[φ]との間であるため、(20)に示したような解釈になることが予測される。なぜなら、CV^1と“ジョン”の関係を考えた場合、[+animate]であり、CV^1がそれと“ジョン”をc統御し、それが“ジョン”を(再帰的に)c統御するDP、“ジョンの部下”が存在しているからである。

次に、(21)の場合、以下のような統語構造を持つ。

(23)



(7) CVが[uφ]を持つ場合、Agreeによって、
(8)を満たし[+animate]を持つDP_1と、同一の[φ]を持つ。
(8) 以下を満たすDP_nが存在しない場合である:
a. DP_nは[+animate]を持つ。
b. CVがDP_nとDP_1をc統御する。
c. DP_nがDP_1をc統御する。

まず(20)の場合と同様に“自分”の発話者の解釈は常に存在すると分析される。そして、次にCV^1が[uφ]を持つ場合、Agreeが行われるのは、“ジョンの部下”ではなく“自分の部下”が持つ[φ]との間である。なぜなら、CV^1と“ジョンの部下”の関係を考えた場合、[+animate]であり、CV^1がそれと“ジョンの部下”をc統御し、それ自体も“ジョンの部下”をc統御するDP、“自分の部下”が存在しているからである。

しかし、CV^1が持つ“自分の部下”の[φ]と、同一の[φ]を、Subjectに含まれる“自分”が持つ場合に文が解釈されないのは、CV^1が持つ“自分の部下”に含まれる“自分”そのものに[uφ]が含まれているからである。

4. まとめ

本研究では、極小主義の枠組みで、機能範疇としての「視点」、CVが存在していると仮定することで、これまで統合的に分析されることなかった以下の例について統一的な分析を与えた。

(24) a. 自分$_i$がやりますよ。 発話者$_i$
b. ジョン$_j$がメアリー$_k$に自分$_{i/j/*k}$の本を渡した。発話者$_i$
c. ジョン$_j$はメアリー$_k$が自分$_{i/j/k}$を嫌っていると思った。発話者$_i$
d. 自分$_{i/j}$の本がジョン$_j$の評判を下げた。 発話者$_i$
e. ジョン$_k$の部下$_j$が自分$_{i/j/*k}$の部下を殺した。 発話者$_i$
f. 自分$_{i/*j/*k}$の部下$_j$がジョン$_k$の部下を殺した。 発話者$_i$

References

Charnavel, Isabelle, and Dominique Sportiche. 2016. “Anaphor Binding: What French Inanimate Anaphors Show.” *Linguistic Inquiry 47*, 2016, pp. 35–87.

Pollard, Carl, and Ivan A. Sag. “Anaphors in English and the Scope of Binding Theory.” *Linguistic Inquiry*, vol. 23, 1992, pp. 261–303.

Reinhart,Tanya, and Eric Reuland.“Reflexivity.” *Linguistic Inquiry*, vol. 24, pp. 657–720.

Cole, Peter, and Li-May Sung. “Head Movement and Long-Distance Reflexives.” *Linguistic Inquiry*, vol. 25, 1994, pp. 355–406.

Watanabe, Akira “FEATURE COPYING AND BINDING: EVIDENCE FROM COMPLEMENTIZER AGREEMENT AND SWITCH REFERENCE.” *Syntax*, 3:3, 2000, pp. 159–18.